

## 子どもの生き方支援事業

財団法人青少年野外教育財団

### 1. 趣旨

16年度は日本の子どもたちが普段抱いている疑問や質問を調べ、それらの疑問や質問に対して、大人や親はどのように答えているのかを調査し、事例集を作成するとともに、この結果を踏まえシンポジウムを行い、子どもの自立支援に取り組んだ。

本年度は、この日本における状況を踏まえ、諸外国の子どもたちと保護者を対象として、同じ手法による調査を実施し、日本との違いを歴史的・文化的背景を踏まえつつ分析・評価して、日本における子どもの自立支援の参考に供する。

なお、調査結果は、事例集として広く教育関係者等に配布するほか、フォーラムを開催し、子どもたちの自立支援を推進する広報・啓発とする。

### 2. 活動実施期間，場所

調査委員会 6月27日、7月20日、8月14日、9月5日、9月23日、10月14日、  
11月29日、12月13日、1月25日、2月2日、3月17日

現地打合せ渡航 タイ：8月14日～19日、9月5日～8日

9月23日～25日、1月28日～2月2日

ドイツ：9月26日～10月1日、1月21日～25日

生き方支援フォーラム 3月5日

### 3. 広報活動，普及活動の概要

- ・トランプの作成：編集委員会で選ばれた回答を、さらに調査委員会で選別し、日本・ドイツ・タイの回答で「世界の子どもなぜなぜトランプ」を5,000個作成し、教育委員会をはじめ全国の関係機関へ配布した。
- ・報告書の作成：調査の概要や結果を報告書としてまとめ、600部作成し、関係機関へ配布した。

### 4. 特徴

日本、ドイツ、タイ、それぞれの国で、子どもたち、親、教師の代表者に依頼し、集まった大人の回答の中から気に入ったものを選んでもらい、結果をトランプにした。カードの1枚1枚に、子どもたちの質問と大人の答えを載せ、イラストを添えるなど、大人にも子どもにも遊びながら楽しんでもらえるよう工夫した。

## 運営体制（調査委員会の設置）

本事業の調査・分析をする目的で調査委員会を設置した。

委員長 富岡 賢治（群馬県立女子大学学長）  
 委員 明石 要一（千葉大学教育学部学部長）  
 結城 光夫（国立那須甲子少年自然の家所長）  
 山本 信也（財団法人日本青年館事業部長）  
 青木 厚志（財団法人育てる会常務理事）  
 白石 収（朝日学生新聞社広告副部長）  
 小野寺 蔵（財団法人青少年野外教育財団専務理事）

## 広報活動、普及活動の実施

月 日	内 容（実施場所、参加者数、指導者数、資料等配布先 等）
	<p>1. 調査の実施報告</p> <p>&lt;タイ王国&gt;</p> <p>子ども達が普段疑問に思っている事や質問について、プレ調査を行った。                      実施日：2005年6月                      調査対象：タイ国の小学3年生～4年生 約130名                      プレ調査をベースに、複数回答あった疑問や質問をまとめて、本調査を行った。                      実施日：2005年7月                      調査対象：タイ国の小学3年生～6年生 約1,500名                      本調査の結果から、大人への質問紙を作成し調査を行った。                      実施日：2005年8月                      調査対象：タイ国の小学生の保護者 回収数 1,055通                      保護者、教師、子どもからなる編集委員会の開催。                      大人の調査結果から、良い回答と思われるものを選別した。                      実施日：2005年9月                      編集委員：12名                      編集委員代表者へのヒヤリング調査を行った。                      タイの生活習慣や教育の事情などのについてのヒヤリング                      実施日：2005年10月                      参加者：6名</p> <p>&lt;ドイツ&gt;</p> <p>子どもたちが普段疑問に思っている事や質問について、プレ調査を行った。                      実施日：2005年11月                      調査対象：ドイツの10歳～12歳の子どもたち 約80名                      プレ調査をベースに、複数回答あった疑問や質問をまとめて、本調査を行った。                      実施日：2005年12月                      調査対象：ドイツの10歳～12歳の子どもたち 約150名                      本調査の結果から、大人への質問紙を作成し調査を行った。                      実施日：2006年1月                      調査対象：ドイツの保護者 回収数 95通</p>



ドイツとタイに共通していることは「将来のこと」についての疑問がそれぞれ65%、91%でトップになっていることである。また、「神」「生」「死」という宗教にかかわる項目が上位になっていることも共通している。学校制度や宗教活動と密接に関係していると推察できる。さらにドイツでは、「宇宙空間のこと」48%、「惑星生物のこと」48%、「病気のこと」48%など科学的な視点での疑問を半数近くもっているということが特徴である。タイでは、「わたしが好きなの？」86%、「なぜ叩くの？」71%、「遊びに連れて行ってくれないの？」65%と、愛情と家族関係にかかわる項目が上位になっていることが特徴といえる。

### 団体のプロフィール

野外教育活動を通じて青少年の健全育成と同指導者の養成及びこれに関する調査研究等を目的としている団体である。小中学生を対象として週末や学校の休業期間に豊かな自然体験の機会を年間を通じて提供する「ネイチャーキッズスクール」を開設するとともに、全国各地で「あそびの達人教室」実施している。また、これら日常的な活動に加え、母子家庭親子を対象とするキャンプや、国内外における子どもたちの長期キャンプ等を実施している。

### 担当者の感想、反省点

本調査の目的は、子どもたちの素朴な疑問について、親や大人がどのように答えているかという点を、昨年度の日本の調査に引き続き、ドイツとタイで調査したものである。まずは、子どもたちが普段「なぜ」と思っていることは何かというアンケートを取った。結果、ドイツの子どもたちは将来のことはもとより、宗教のこと、科学的なことにまで興味関心が及んでいた。タイの子どもたちは、家庭の愛情や将来のこと、宗教のことに興味関心があった。それに比べ、日本の子どもたちの疑問は、学校、勉強といった日常の域を出ないということが気にかかった。そのような「疑問」に、それぞれの国の大人や親はどのように答えているのか、大人向けアンケートを実施し、結果をトランプにまとめた。子どもたちの「なぜ」に対して明確な回答は無く千差万別である。子どもたちも正解を求めているわけではなく、自分たちにどう向き合ってくれるかを試しているのだと考える。大人の考え方の姿勢で、真剣なのか、逃げているのか判断する。今回のアンケート結果を見て、日本・ドイツ・タイを問わず、大人は子どもの問いかけに正面から答えていく必要があると感じさせられた。つたない自分の言葉であっても自分の言葉で答えることが子どもたちの健全な成長の糧となる。今大人達の姿勢が問われている。また、この国際調査を踏まえて、もっと日本の子どもたちは、いろいろな領域に興味関心を持つことが必要であると感じた。そのためには、日常の生活圏を打ち破るいろいろな体験が必要である。子どもたちが多種多様な体験をするためには、大人が意図的にサポートする必要があると考える。

## 青年長期ボランティア計画普及啓発事業

社団法人 日本青年奉仕協会

### 1. 趣旨

青年長期ボランティア計画とは、青年が全国各地の活動先に長期間滞在し、ボランティア活動に専念するプログラムで、社会課題に取り組む団体などへの「貢献」と青年自身の「学び」を目的としています。

本事業は、長期社会奉仕体験活動の認知度を高め、青少年が心豊かに生きるために必要な奉仕体験活動の普及・啓発を図り、青年と保護者、教育関係者、ボランティア活動団体に長期社会奉仕の実践活動を紹介し、体験の場づくりの開発と参加者層の拡大を行い、青少年の自立を支援する。

### 2. 活動実施期間，場所

平成17年7月～平成18年3月。国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区）をはじめ全国各地で実施、開催。

### 3. 広報活動，普及活動の概要

- ・ポスター、リーフレットの作成...長期社会奉仕体験活動を広く周知
- ・ガイドブック、ガイドビデオの作成...活動希望者や大学などに配布
- ・地域説明会の実施...ガイドブック、ガイドビデオを活用し、活動経験者、実際に活動している人を交えて普及啓発
- ・受け入れ団体連絡協議会の実施...長期社会奉仕体験活動の活性化と普及啓発についての方策を研究協議
- ・アンバサダー研修の実施...地域説明会の実施などに関する研修
- ・全国フォーラムの実施...これまでの成果や長期の活動を実際に経験した青年の声などを発信

### 4. 試みと成果、課題

全国各地で行われる地域説明会で使用することを主な目的として、視聴覚教材の製作を行い、紙やインターネットベースの資料からは読み取ることのできない、より説得力のある資料作成し普及広報に役立てた。

個々の地域説明会での、参加人数を多くしていくことが課題である。

### 5. 特徴

青年が全国各地の活動先に長期間滞在し、ボランティア活動を通しての社会貢献活動と学びの機会を提供するプログラムに、参加しようとしている青年と、その青年たちを受け入れる活動先をつなぐための、普及啓発、募集広報を実施する。

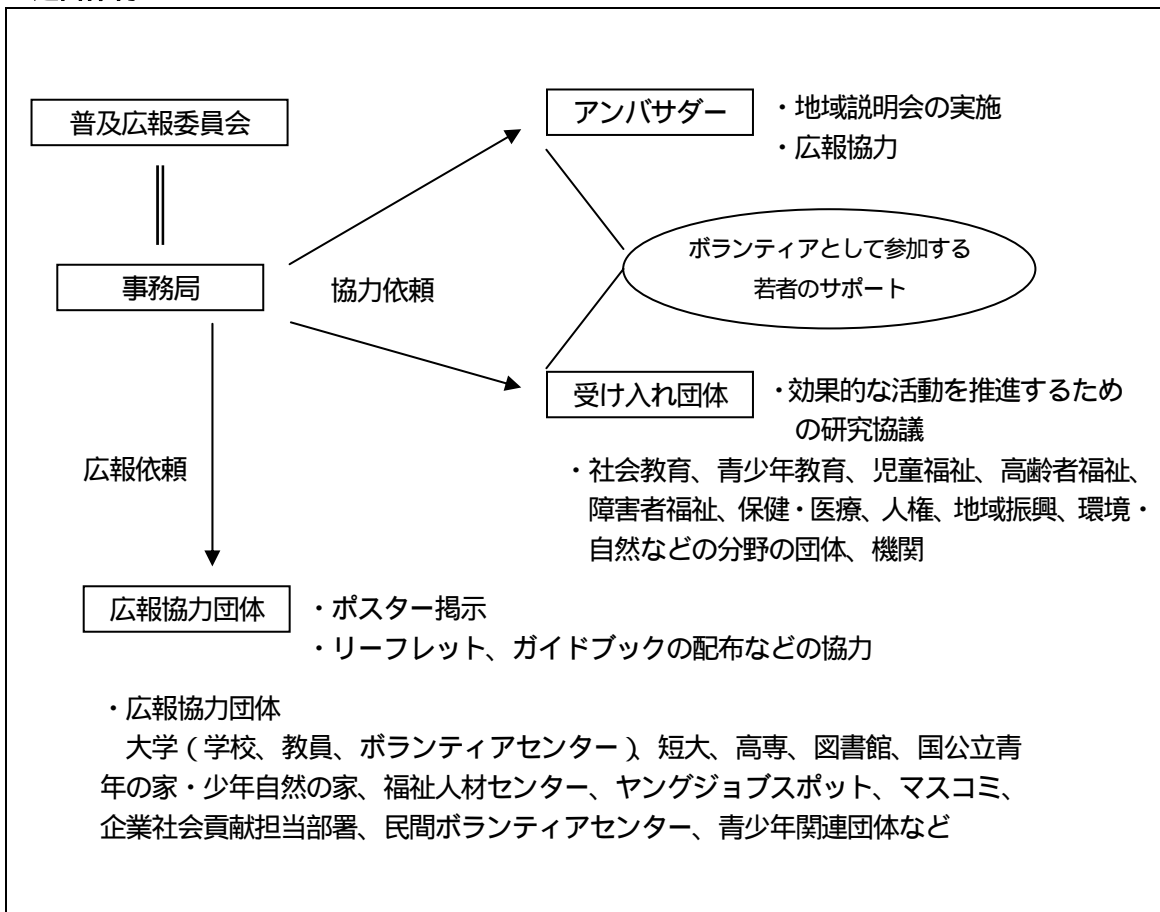
## 事業の特色

長期社会奉仕体験活動の認知度を高める事によって、より多くの若者に参加の機会を普及・広報するために、地域説明会や全国フォーラムの開催を通じて、青少年のみならず教育関係者、ボランティア活動団体に長期社会奉仕の実践活動を紹介した。

地域説明会をきめ細かく実施することとあわせて、他団体のイベントにブース出展し、より多くの人への周知を図った。さらに、大学やボランティア活動団体、中間支援団体などに対して、普及・啓発の協力要請を行い、さらに多くの人に知っていただくように依頼をした。

さらに、大学ボランティアセンターなどの参加もあった全国フォーラムでは、活動者の体験報告とOBによる体験はどう活かされたかについてのシンポジウムを行った。同時に活動先とアンバサダーの合同会議を行い、この事業の効果的な展開について意見交換を行った。本事業によって、長期社会奉仕体験活動の意義と効果、現状を普及啓発し、多くの人に計画への理解をより一層深めることができ、青少年の自立支援を促進することになった。

## 運営体制



## 広報活動、普及活動の実施

月 日	内 容 (実施場所、参加者数、指導者数、資料等配布先 等)
8月～12月	長期社会奉仕体験活動を青年や社会に周知し、理解を深めるために普及啓発 ポスター、リーフレット、ガイドブック、ガイドビデオを活用し周知、広報(大 学、公共機関、青少年関連団体など)。ボランティア活動先資料により活動の促 進。活動体験集による普及啓発を行った。 地域説明会による普及広報(開催日時、場所、参加者数は別表)
7月 1日～ 7月 2日	受入団体研究協議会(22団体、22名参加) 効果的な活動を推進するための研究協議を行った。
7月 2日～ 7月 3日	アンバサダー研修(25名参加) 青年を対象とした長期社会奉仕体験活動を普及広報するための「アンバサダー」を 養成した
3月 1日～ 3月 4日	全国フォーラムの開催(報告者による準備および運営)(約150名参加) 長期社会奉仕体験活動の理解を促進するために開催し、参加経験者や推進関係者の 活動報告などによる普及啓発を行った。
3月 3日	アンバサダー、受入団体合同会議(22名参加) 地域説明会や全国フォーラム、また普及広報についての意見交換を行った。
3月10日	普及広報委員会 事業概要の説明、広報についての説明、事業全般についての意見交換
3月15日	広報先、媒体等の妥当性について、応募者への情報提供のあり方について
3月21日	今年度の広報についての振り返り、評価

## アンケート結果や参加者の感想等

全国フォーラムの感想(一部抜粋)

- ・全員がとてもすっきりした表情をしているのがすごく嬉しかった。この春からの活動に不安  
がたくさんあり、重かった心が少し軽くなりました。ありがとう。
- ・児童福祉チームの発表でもらい泣きしてしまいました。どの発表も自分の声でのパフォー  
ムスで、「熱」の熱さを感じました
- ・生の声が聞くことができた。なつかしさと普段の生活で忘れてしまったことを気づいた
- ・限られた時間で報告でこんなにも素晴らしいから、この1年間はほんとに私が思

っている何百倍も何千倍も素晴らしいものだったのだらうと思いました。

- ・緊張がすごく伝わってきて伝えることのもどかしさ等も見られましたが、すごくいいものが見られました。涙、とてもすてきでした。想いが皆さん、強くあられるのですね。

シンポジウムはいかがでしたか？（一部抜粋）

- ・これから参加していく青年たちへのモデルになるお話だった。V365の価値がとてもよく理解できた
- ・先輩方の経験（新旧）を聞け、その後の進路などを聞けて良かった
- ・今の自分、活動を終えてから今までの自分、そして未来の自分の姿、いろいろな自分を思い出し、思い描きながら話を聞かせていただいた。V365に参加してよかった。未来も明るい、と実感。勉強になった。
- ・「甘えではなくて30歳をめどに自分の生き方を決められたらいい。それまではいろいろな事を経験すること」という言葉が心に残った。
- ・諸先輩方の話はとても参考になりました。今の自分をもっと固めていこうと思います

### **事業成果の普及・啓発**

ポスターやリーフレット、ガイドブック、ガイドビデオなどを活用し、地域説明会（特にイベントへの出展）や全国フォーラムを通じて、長期体験プログラムを多くの人へ周知することができた。

### **団体のプロフィール**

日本青年奉仕協会は1976年（昭和42年）の設立以来国内のボランティア・グループや団体、学校、企業、研究機関、さらには世界のボランティア推進機関、団体にも幅広いネットワークを築き、ボランティアに関する相談、助言、情報提供、活動の場の提供、研究や交流の場づくり、研究開発、出版活動、国際交流などを行っている。

### **担当者の感想、反省点等**

- ・地域説明会や全国フォーラムの広報が十分ではなかったためか、なかなか参加人数が多く集まらず苦労をした。
- ・ポスターやリーフレットなどの紙媒体を送付する方法の有効性は、ある程度の成果を上げることはできるが、より大きな成果を上げるために、今回制作したガイドビデオを屋外テレビなどで上映したり、大学の授業として取り入れてもらったりとより多くの人目の入る形での普及広報活動を目差していきたい。

## 食・性・職による青少年の自立支援事業

社団法人全国子ども会連合会

### 1. 趣旨

青少年の自立支援を3つの視点から捉え、直接小・中学生とその保護者に対して、啓発事業を実施した。また、青少年自立のためのプログラム開発を行った。その事業内容・研究成果を報告書を作成し、学校教育および青少年団体へ広報し、全国的な展開へとした。

視点1：食について、スナック菓子の好ましい摂り方という具体的なことから学ぶ。食の自己管理の視点から自立するという点について考えた。

視点2：性について、乳房の発達と下着の選び方という具体的なことから学ぶ。女子を対象として、発達にあった下着選択および体の変化と心の視点から自立するという点について考えた。

視点3：職について、本会が文部科学省から委託され実施してきた「子ども会ワーキングホリディ＝職業体験＝」などの実績をもとに、進路・進学に係る地域社会での子どもの自立をどのように支援することができるのかプログラム開発をした。

この事業実施にあたり、(株)ワコール、カルビー(株)の協力を得て、実施する。

### 2. 活動実施期間及び総泊日数

平成17年8月8日，8月9日，8月21日，11月5日，11月26日 5日間

### 3. 活動場所・概要

月日	内 容	実施場所	参加者数	指導者
8月8日	大田市姫里地区自立支援事業 「自分が好きさ だから自分を学ぼう」と題して8月8日子ども会の日にコミュニティ会館で、ツボミスクールを実施し、小学校講堂でスナックスクールを実施した。 午前中は女子を対象にした事業であったが、男子は、自由遊びと子ども会会館での創作活動を楽しんだ。	姫里地区コミュニティ会館 姫里小学校講堂	ツボミスクール 小学生コース29名 保護者コース22名 スナックスクール 80名	ツボミスクール講師 4名 スナックスクール講師5名 リーダー 5名 地区指導者 7名
8月9日	東京都豊島区地区自立支援事業 8月8日子ども会の日関連事業として、実施した。前半開催したスナックスクールは保護者と一緒におやつの適量について低学年も交えて進めることができた。後半のツボミスクールは、参加者が低年齢であったため、クラフト教室を急遽開催し対応した。	豊島区立勤労福祉会館 第3・4・7会議室	スナックスクール 28名 ツボミスクール 小学生コース8名 保護者コース4名	スナックスクール講師2名 ツボミスクール講師3名 地区指導者3名 リーダー 2名

8月21日	横浜市地区自立支援事業 8月21日開催であるが、8月8日子ども会の日の関連事業として実施した。 午前：ツボミスクール、午後：おやつスクールを実施した。カルビー(株)のスナック菓子の提供を受けて、子ども会指導者が展開するおやつスクールを実施した。 保育担当リーダーを置く。	横浜市立育成センター会議室	ツボミスクール 小学生コース7名 保護者コース14名 おやつスクール 35名	ツボミスクール講師3名 おやつスクール講師2名 リーダー 3名 地区指導者2名
11月5日	京都市地区自立支援事業 ツボミスクールを実施する。	北文化会館	ツボミスクール 小学生コース7名 保護者コース6名	ツボミスクール講師2名 リーダー 3名 地区指導者2名
11月26日	川崎市地区自立支援事業 ツボミスクールを実施する。 保育担当リーダーを置く。	麻生区自治会館	ツボミスクール 小学生コース15名 保護者コース10名 幼児5名	ツボミスクール講師2名 リーダー 5名

#### 4. 試みと成果、課題

本事業は企業との連携にて実施した。指導に際しては、企業からの全面的な支援により展開することができた。報告書にまとめ、周知したことによって、本事業を今後とも各地で実施することができるように企業との協力体制を確立することができた。このことにより、スナックスクールおよびツボミスクールが全国各地で展開できることになった。また、食事のコントロールによる自立と下着と成長を考えることにより、自分を大切にすることによる自立方法を確立できたと思う。

自立支援は青少年育成の課題である。地域社会の中で自己有用感を得る活動を如何に大人が準備し、認めることが出来るかが課題である。

#### 5. 特徴

本事業は、企業との連携を模索した活動であることが特徴と言える。企業の社会貢献という視点だけでなく、企業の存在そのものが地域社会に貢献することや企業理念をきちんと伝えることが職業観を醸成することにつながるという図式を描いた。



【真剣に話を聞く参加者たち】

## 事業の特色

本事業は特徴にも記述したが、企業との連携を元に青少年の自立を考えたものであること。青少年の自立の視点として職業観を醸成することを検討したことが大きい。対策としての捉え方ではなく、年少時から有用感を育む活動に重点をおいたことが特色となる。

また、性・食・職という3つの自立のための重要な要素を事業展開の中核にしたことも意味がある。

## 運営体制

・企画委員会委員	
日本教育新聞社(株)広告局 部長	池上 文雄
(有)ヒロプランニング代表取締役	井上 弘
(株)毎日EVRシステムネットワーク事業本部長	中道 廣
(株)ワコールお客様センター チーフ	永治 知美
カルビー(株)広報室	麦田 裕之
横浜市子ども会連絡協議会会長	三橋 赫夫(代理：辻 正人)
京都市子ども会育成連絡協議会会長	西村 佳子
全国子ども会連合会専門委員	岡村 誠
K研究所 所長	北島 貞一
東京都子ども会連合会常任理事	小菅 知三
全国子ども会連合会常務理事	宇田川光雄
	田原 信幸(事務担当)
上記10名の委員に本連合会常務理事を加えて、11名で委員会を構成した。	
この10名の委員をワーキンググループに分けて、効率のよい運営をした。	
・ワーキンググループ 食・性・職による青少年の自立支援の方法を3つのグループに分けて、その内容を検討した。	
食グループ	カルビー(株)が実施する学校「スナック教室」を地域開催にするにはどうしたらよいかを検討し、大阪市・東京都・横浜市の3地区で実施。(オブザーバー シュガーレディマネジャー 島津陳子料理研究家)
性グループ	(株)ワコールツボミスクールの地域開催の方法論の確立。大阪市・京都市・横浜市・東京都・川崎市の5地区で実施した。
職グループ	自立支援の理論構築、地域での職業体験、学校での進路指導、学校と地域が連携した進路指導、等

## 体験活動の実施

月 日	内 容
平成17年 7月14日	第1回企画委員会 ・事業全体像の確認と食・性・職の3つの視点に立った取り組み視点 ・委員会のワーキンググループの決定
7月20日	第2回企画委員会 ・8月8日子ども会の日「自立支援事業」実施地区の決定 ・大阪市姫里地区子ども会における実施要領の検討 ・8月9日 東京都豊島区子ども会における実施要領の検討(京都市の代わりに大阪市の参加)
7月26日	第3回企画委員会 ・8月21日 横浜市子ども会における実施要領の検討 ・カルビー(株)のスナックスクール実施不可能を受けて、ヒューレック研究会が実施するおやつ教室の検討
9月29日	第4回企画委員会 ・11月5日開催の京都市地区における実施要領の検討 ・11月26日開催の川崎市地区における実施要領の検討

平成18年 2月11日	第5回企画委員会 ・ 自立支援報告会を評価会 ・ スナックスクール、ツボミスクール実施報告会 ・ 報告書評価
----------------	--

#### 職ワーキンググループ会議開催状況

月 日	内 容
平成 17年 8月10日	第1回職グループ会議 視点の確認と学校・地域での活動内容事例紹介 ・ 基礎理論の組み立て
8月23日	第2回職グループ会議 ・ 報告書内容の検討

#### 性ワーキンググループ会議開催状況

月 日	内 容
平成17年8月7日	第1回性グループ会議 開催打合
8月8日	第2回性グループ会議 開催打合
8月20日	第3回性グループ会議 開催打合
11月4日	第4回性グループ会議 開催打合
11月25日	第5回性グループ会議 開催打合

食ワーキンググループ会議 カルビー(株)のスタッフによるスナックスクールについては、マニュアルがあるのでとくに会議を開催しなかった。

#### 募集方法，広報活動

チラシによる募集

#### 事業成果の普及・啓発

教育新聞、大阪日日新聞に活動が取り上げられた。また、報告書を作成し、平成18年度に実施しているツボミスクールにおいて、保護者へ閲覧するなど現在でも啓発を進めている。

#### 団体のプロフィール

都道府県・指定都市の子ども会連合組織の代表者を社員とする社団法人であり、地域の自治体等で結成される単位子ども会の充実発展をもとに、子どもたちの健全育成をすすめる単位子ども会、市区町村連合組織等を支援する全国団体である。

#### 担当者の感想，反省点

自立支援というキーワードをどのような切り口から捉えるかが重要なことだとまず考えた。

「自立」を、仕事につき、生計を立て、幸せに生きることと定義すれば、相談、職業体験などさまざまな支援方法がある。少年期にとっての自立支援は、子ども集団の中での他者と自己との関係性に重点が置かれるものとする。他者と自己との関係性を捉えたときに、自分自身がその集団に属して認められていることを自分も評価し、他者も評価する関係と捉えることができる。このような自己有用感を今回の事業の基本に据えたことは意義があったと考えている。

## 第9回野外伝承遊び国際会議・第7回野外伝承遊び国際大会

社団法人 青少年交友協会

### 1. 趣旨

「野外伝承遊び」は、古代から子どもたちの体力・精神力・社会性などを培う上で重要な役割を果たしてきた。しかし、近年の急速な科学技術の発展に伴い、その重要性が忘れ去られ、子どもの野外での遊びが評価されず、遊びそのものが変化している。

そこで、各国の研究者や教育関係者が集い、野外伝承遊びの果たす役割や今後の少年教育のあり方について討議を行う。さらに、青少年に、各国の野外伝承遊びを体験してもらう機会と場を設定することによって、今後の青少年教育に国際的なレベルで貢献することを目的とする。

### 2. 参加者数

- ・野外伝承遊び国際会議 参加者数 215名（教育関係者、学生、一般）
- ・野外伝承遊び国際大会 参加者数 1,650名

### 3. 活動実施期間及び総泊日数

- ・野外伝承遊び国際会議 平成17年10月29日（土）～31日（月）
- ・野外伝承遊び国際大会 平成17年10月30日（日）

### 4. 活動場所・概要

- ・野外伝承遊び国際会議 実施場所：国立オリンピック記念青少年総合センター  
後援：外務省、国立大学法人東京学芸大学、東京都教育委員会、独立行政法人国立オリンピック記念青少年総合センター、参加各国大使館
- ・野外伝承遊び国際大会 実施場所：東京都代々木公園陸上競技場  
後援：外務省、国立大学法人東京学芸大学、東京都教育委員会、渋谷区、独立行政法人国立オリンピック記念青少年総合センター、参加各国大使館

### 5. 試みと成果、課題

体験活動の一つである野外伝承遊びは、体育ではあるがスポーツではなく、人類に共通の文化であり、誰もが夢中になって参加できる素朴な体験活動で、その重要性に気づいてもらうことをねらいとした。少年期の人間教育にとっていかに重要であるかについて、小学校教育関係者に理解を深めてもらうことが今後の課題である。

### 6. 特徴

世界の野外伝承遊びを一堂に集め、披露と体験をすることによって、少年期の遊びの類似性に気づき、子どもたちの交流や国際理解を深めてもらうことができた。また、科学文明社会に対応するこれからの少年教育にとっての野外伝承遊びの重要性を世界に向けて発信した。

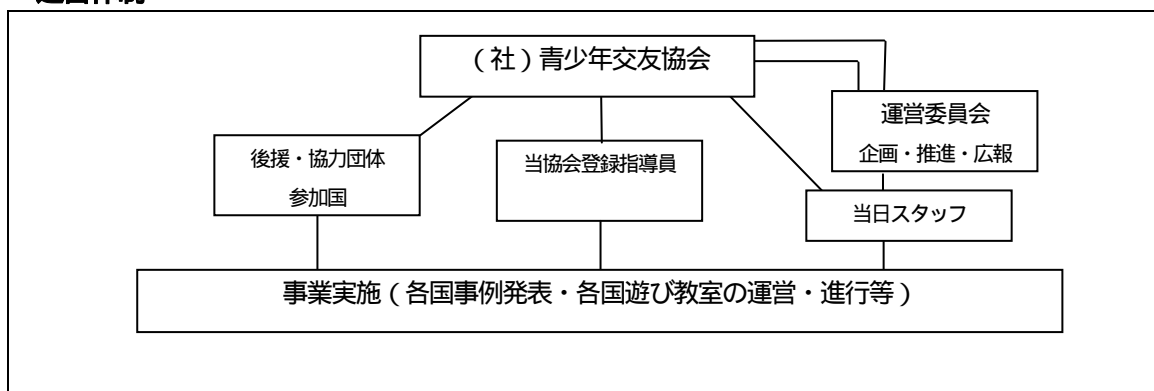
## 事業の特色

野外伝承遊び国際会議では、世界各国の学者や研究者の参加のもと、学校や地域社会で子どもたちに接している教員や指導者、また将来教員や指導者になることを目指している学生を主な対象として、野外伝承遊びについて研究討議や実技を含めた会議を行った。最終日には、「これからの科学文明社会に対応するため、子どもの健全な育成に野外伝承遊びの重要性を提唱する」との議定書に、参加各国講師の賛同で署名がなされ、全員が各国へ持ち帰り、その趣旨を関係者に情報発信することとした。

野外伝承遊び国際大会では、子どもたちが、参加各国の位置が示された世界地図の入った「パスポート」を持って設営された各国のテントを回り、遊びを体験した。






事業の企画・運営には、一般から10名の運営委員を公募し、事前及び事後の会議（運営委員会）において、新しい視点からの積極的な意見を出してもらった。各国事例発表および世界の遊びの実技披露については、外務省、在外日本大使館、在日各国大使館等の協力を得た。指導員、当日スタッフ、外国人協力者等を合わせ、のべ300名近くの協力を得て、事業を実施した。

## 運営体制



## 広報活動、普及活動の実施

月 日	内容（実施場所、参加者数、指導者数、資料等配布先等）	実施場所	参加人数	指導者数
7月下旬	「野外伝承遊び国際大会」ポスター・パンフレット作成。 教育委員会、社会教育施設、近隣小中学校、教育関係団体等へ配布、掲示依頼。			
8月上旬	「野外伝承遊び国際会議」ポスター・パンフレット作成。 教育委員会、教育施設、教育系大学等へ配布、掲示依頼。			
8月中旬	協力団体への告知依頼。			
8月下旬	マスコミへの情報提供。各新聞社、情報誌に掲載依頼。			
10月8日	全体打ち合わせの実施。各国の遊び内容確認及びスタッフの顔合わせ。			

<p>10月29日（土） ～31日（月）</p>	<p>「野外伝承遊び国際会議」 ○基調講演「野外伝承遊びの重要性」 森田 勇造（青少年交友協会理事長） ○事例発表 「日本の野外伝承遊び」山本 清洋（鹿児島大学教授） 「カメルーン」マルセル・フダ・ンジョド （ヤウンデ大学教授） 「キルギス」アルスタンベック・イレバエフ （国立キルギス科学アカデミー研究員） 「デンマーク」キット・ノアゴー （ゲアレヴライエパーク伝承遊び工房次長） 「バングラデシュ」マハブバ・ナスリン （ダッカ大学教授） 「ベトナム」アン・トゥー・チャー （ベトナム民族博物館研究員）/ 「ポルトガル」マリア・フォルテ （ポルトガル言語学高等研究所教授） ○パネルディスカッション「野外伝承遊びの意義と現 状」司会 浜野隆（お茶の水女子大学助教授） ○各国の野外伝承遊びの実技披露 ○各国講師とオブザーバーによる 国際会議「野外文化教育の展望」</p>	<p>国立オリン ピック記念 青少年総合 センター 国際会議室</p>	<p>29日、 31日 計215名</p>	<p>29日 34名 / 31日 24名</p>		<p>各国事例発表（デンマーク）</p>		<p>パネルディスカッション</p>		<p>国際会議「野外文化教育の展望」</p>
<p>10月30日（日）</p>	<p>「野外伝承遊び国際大会」 ○世界の野外伝承遊び教室 （日本・アメリカ・イラン・インド・インドネシア・ ウズベキスタン・エチオピア・カメルーン・カンボ ジア・キルギス・タイ・中国・デンマーク・トルコ・ バングラデシュ・フィリピン・ベトナム・ペルー・ ポルトガル・モンゴル・ラオス 21カ国） ○野外伝承遊び国際競技大会（竹とんぼ・お手玉）</p>	<p>代々木公園 陸上競技場</p>	<p>1,650名</p>	<p>226名</p>		<p>竹とんぼ 国際競技大会</p>				
<p>12月下旬</p>	<p>『野外伝承遊び国際大会報告書』作成。教育委員会、教育 系大学、公立図書館等へ配布、成果の普及につとめた。</p>									
<p>1月下旬</p>	<p>『野外伝承遊び国際会議報告書』作成。教育委員会、教育 系大学、公立図書館等へ配布、成果の普及につとめた。</p>									
<p>1月下旬</p>	<p>当協会機関紙『野外文化』に特集記事を掲載し、全国の教 育委員会、教育関係団体、教育機関等に送付、成果の普及 につとめた。</p>									
		 <p>文化の相似性と異質性を学ぶ ペルーの片足跳び「ムンド」</p>								

## 安全への配慮

指導者に対しては、事前の打ち合わせ会議を設け、事業の内容を十分に理解してもらうと同時に、安全への十分な配慮を依頼した。特に、遊びの実技披露と体験の場においては、指導者を各所に配置し、注意を喚起した。当日参加者については傷害保険に加入し、万一来に備えた。また、会場警備を専門業者へ依頼し、事故防止につとめた。

## 募集方法、広報活動

ポスター、パンフレットを作成し、教育委員会、社会教育施設、近隣小中学校、教育関係団体、教育系大学等へ配布、掲示依頼を行った。



日本と外国の子どもが一緒になって遊ぶ  
ウズベキスタンのはないちもんめ  
「オックテラクミ クックテラク」

## アンケート結果や参加者の感想等

- ・世界に色々な遊びがあること、日本と同じような問題が他の国々でも起こっていることを知った。実技披露で学んだ遊びを、さっそく地域での自分の活動の中で実践している。
- ・伝承遊びを意識的に見直さなければならないほど、自分自身も情報メディアの影響を強く受けて大人になったことに気づかされた。伝承遊びの良さを伝えていくことの必要性を感じた。
- ・自分がこれまで行ってきた活動について、改めて考えさせられた。課題の困難さを受け止めつつ、今後は、五感をフルに使った、食、見、触、遊、感活動を目指していきたい。
- ・世界中の色々な遊びを体験でき、楽しい一日だった。また参加したい。

## 事業成果の普及・啓発

当日の内容をまとめた報告書を作成し、教育委員会、教育系大学、国公立図書館等へ配布、成果の普及につとめた。

『野外伝承遊び国際会議報告書』では、基調講演、各国事例発表、パネルディスカッション、国際会議「野外文化教育の展望」などについてまとめた。より広い範囲に向けて啓発活動を行うため、基調講演および各国事例発表については、英文も掲載した。

『野外伝承遊び国際大会報告書』では、当日披露された各国の遊びについて具体的な遊び方をまとめ、総合的な学習や特別活動などに必要な体験活動の場で、すぐに活用できる内容とした。

## 団体のプロフィール

青少年の健全育成を目的に、体験活動を中心とする“野外文化教育”を全国規模で啓発・実践している。

## 担当者の感想、反省点等

野外伝承遊びの重要性や今後の教育のあり方について、参加者の中から、それぞれの活動にいかしていきたいとの声が多く聞こえてきていることは、今後の青少年教育への貢献という面において、勇気づけられる点である。今回の事業を通して得られた成果について、報告書等を活用し、引き続き普及・啓発を進めていきたい。野外伝承遊びについての認識を深めてもらうための一層の努力・工夫が、これからの教育にとって必要であると感じている。

## 体験活動指導者研修会

社団法人 青少年交友協会

### 1. 趣旨

人は知識や技能だけで向上心をあおることはできず、豊かな科学文明社会は多くの人々に不安と不満をもたらす。それらに対応するためには、自然や共同生活等の体験活動を通して、社会性や道徳心、生活の知恵、言語能力、表現する力等を培い、人間力を高めることが重要である。そこで、これからの青少年教育の指導者や、保護者等を主な対象とし、共同宿泊を伴う体験活動に関する研修会を開催することによって、指導者としての資質向上を促し、青少年の自立支援に役立てることを本事業の目的とする。

### 2. 参加者数

参加者数 21名      パンフレットを作成し、教育委員会、青少年教育施設、教育関係者等に配布、掲示依頼を行った。また、新聞、情報誌等への掲載依頼を行ったところ、21歳から66歳までの幅広い年齢層の研修者が、関東一円ならびに長野・山梨、三重等の各県から集まった。

### 3. 活動実施期間及び総泊日数

平成17年11月23日(祝)～27日(日) 4泊5日

### 4. 活動場所・概要

国立信州高遠少年自然の家にて、青少年教育指導者や教員、保護者を対象とした、生活体験を中心とする体験活動の研修会を実施した。

### 5. 試みと成果、課題

子どもに最も近い存在である親を指導者として認め、現場での実践に役立つように、理論と実践を組み合わせた内容とした。その結果、人間性や社会性を培うために重要な体験活動の認識を促すことができた。青少年教育にとって最も重要な指導者は、日常生活で接している保護者であることの認識をより高めることが今後の課題である。

### 6. 特徴

指導者としての参加対象を、教育関係者に留まらず、子どもにとって最も身近な存在である保護者にまで広げて募集を行ったことにより、20代から60代までの参加があった。

## 事業の特色

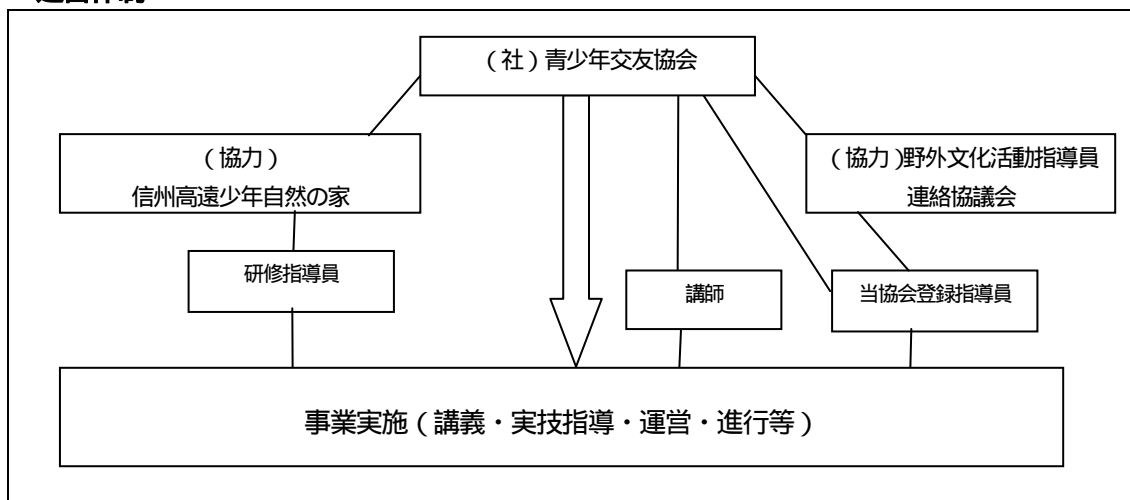
青少年教育の指導者や保護者等を対象とする、体験活動に関する研修会は、理論と実践を組み合わせた内容とし、人間性や社会性を豊かに培う体験活動の認識を促し、現場での実践にいかしてもらえよう工夫した。

実技では、「漬物作り」「豆腐作り」などや自炊のほか、小刀を使用した「野外生活用道具作り」、「紐の結び方」、消防署による「救急法」、自己鍛錬として歩く「22kmかち歩き大会」など、生活体験を中心とする12項目を実施した。

理論では、総論「生きる力を培う体験活動」をはじめ、「道徳と体験活動」「言葉と体験活動」「心の発達と体験活動」など、各分野を代表する5名の講師陣により、体験活動の意義や指導者の心得に関する講義を行った。





また、4泊5日の共同生活を行うことで、研修者同士の交流や情報交換の場とした。

## 運営体制



## 広報活動、普及活動、体験活動の実施

月 日	内 容 (実施場所、参加者数、指導者数、資料等配布先 等)	実施 場所	参加 人数	指導 者数
8月上旬	パンフレット完成 教育委員会、青少年教育施設、教育関係者等に配布、掲示依頼。			
9月上旬	マスコミへ、新聞、情報誌等への掲載依頼。			
11月23日(祝) ~27日(日)	体験活動指導者研修会 実施 (4泊5日) ○11月23日(祝) 開講式 講演「生きる力を培う体験活動」 森田勇造(青少年交友協会理事長) 班の集い、懇親会	国立信州 高遠少年 自然の家	21名	計11名

	<p>○11月24日（木）</p> <p>講演「道徳と体験活動」 押谷由夫（昭和女子大学教授）</p> <p>野外生活用道具作り、自炊と漬物作り</p> <p>講演「日本の歳時と植物」 伊藤純郎（筑波大学助教授）</p> <p>講演「言葉と体験活動」 矢澤真人（筑波大学助教授）</p> <p>ビデオ上映「グリーンアドベンチャー」と協議</p> <p>○11月25日（金）</p> <p>実技「グリーンアドベンチャー」</p> <p>実技「竹とんぼ作り」と「競技会」 飯塚進（野外文化活動指導講師）</p> <p>実技「日常的な紐の結び方」 藤曲敏春（国立中央青年の家非常勤講師）</p> <p>自炊と豆腐作り、暗闇体験</p> <p>○11月26日（土）</p> <p>講演「心の発達」 杉森伸吉（東京学芸大学助教授）</p> <p>自炊（そばうち）</p> <p>実技「応急手当と救急法」</p> <p>自炊（バラ寿司）</p> <p>ビデオ上映「よみがえる子ども達」と協議</p> <p>○11月27日（日）</p> <p>実技「信州高遠22kmかち歩き大会」への参加 閉講式、指導員証授与</p>		<p>講義の様子</p>		<p>グリーンアドベンチャー（自然環境教育）</p>		<p>かまどで自炊（火吹き竹を使って）</p>		<p>救急法（AEDを使った実習）</p>
<p>12月上旬</p>	<p>事業実施報告書の作成。成果の普及啓発のため、事業内容および成果をまとめた写真入り報告書を作成した。</p>								
<p>1月下旬</p>	<p>当協会機関紙『野外文化』に特集記事を掲載し、全国の教育委員会、教育関係団体、教育機関等に発送。成果の普及につとめた。</p>								

### 安全への配慮

特に実技研修中は、指導者を各所に配置し注意を喚起した。研修者は体験活動の指導者であることから、活動中の安全面への配慮については、研修の中で説明してもらうよう、指導講師へ依頼した。また、参加者に傷害保険に加入してもらい、万一に備えた。

## **募集方法，広報活動**

パンフレットを作成し、教育委員会、青少年教育施設、教育関係者等に配布、掲示依頼を行った。また、マスコミ、新聞、情報誌等への掲載依頼を行った。

## **アンケート結果や参加者の感想等**

- ・自然の力に支えられて生きていることを改めて感じた。次の世代に引き継いで行きたい。
- ・異年齢集団との交流は、考え方の幅を広げるのにより機会だった。言葉使いに注意を払うきっかけにもなった。
- ・少年期の体験が、人間の成長にとっていかに大切か、深く考えさせられる機会となった。今後は指導者としての自覚を持って、青少年教育の活動をしていきたい。

## **事業成果の普及・啓発**

研修会では、体験活動に関する知識・技術力を高めただけでなく、異年齢集団による共同生活を通じ、社会性・道徳心・生活の知恵・コミュニケーション能力等の人間力をも高め、体験活動指導者としてふさわしく成長を遂げることができた。

研修者はいずれの実技、講義に対しても非常に意欲を持って取り組み、講師に熱心に質問を投げかけ、メモを取る様子が随所に見られた。

さらに、共同生活を通じた共通体験によって研修者の中で仲間意識が育まれ、年長の班長の下、日を追うごとに社会性が高まり指導者としての資質を高めていく様子が、目に見えて感じられた。また、参加者に保護者が加わったことで、様々な経験を持つ研修者たちがお互いに刺激し合い、情報交換の場ともなり、非常によい効果をもたらした。

これらの成果は、青少年教育施設や家庭において、今後十分に生かされると考えられる。

なお、終了後は、事業内容および成果をまとめた事業報告書を作成するとともに、当協会機関紙にて特集記事を組み、全国の教育委員会、教育関係団体、教育機関に発送し、成果の普及・啓発につとめた。

これからの科学文明社会において、こうした子どもに最も近い保護者をも取り込んだ体験活動の指導者研修は、今後ますます重要な役割を果たすと考えられる。

## **団体のプロフィール**

青少年の健全育成を目的に、体験活動を中心とする“野外文化教育”を全国規模で啓発・実践している。

## **担当者の感想，反省点等**

参加者の意識レベルが総じて非常に高く、有意義な研修になったと感じている。土日祝日を利用して、仕事を休まずに参加できる日程にしてほしいという声もあり、プログラムと日程の調整については今後検討したいと考えている。

## 「カンガルーキャンプ」

独立行政法人国立青年の家

### 1. 趣旨

近年、「ひきこもり」の状態にある青少年の数は増える傾向にあり、このことに対して社会は、適切な理解と対応を検討しなければならない状況になっていると思われる。

本事業では、この課題に対応すべく、「ひきこもりがちな青年」を対象とした事業を実施し、自然体験やグループワークを通して、自主性、社会性を育み、心身ともに健康な生活ができるようなきっかけをつかむ場を提供する。また、その運営手法や指導上の留意点等の成果を、公立青少年教育施設をはじめとする教育関係者に広く普及させることで、青少年の自立支援を推進する社会基盤の整備に寄与する。

### 2. 活動実施期間，場所

7月 2日～	7月 4日	第1回実行委員会（実地踏査）	岩手山青年の家とその周辺
7月18日～	7月22日	親子面談オリエンテーション	静岡、宮城、岩手
7月18日～	7月22日	第2回実行委員会（実地踏査）	岩手山青年の家とその周辺
8月26日～	9月 4日	ホッとキャンプ	岩手山青年の家とその周辺
11月17日～	11月20日	フォローアップキャンプ	岩手山青年の家とその周辺
	11月20日	第3回実行委員会	岩手山青年の家

### 3. 広報活動，普及活動の概要

東北6県の全ての高等学校、大学、専修学校にチラシを配布した。また、報道機関に募集記事の掲載を依頼するとともに、当施設のホームページにもアップし参加を呼びかけた。

### 4. 試みと成果、課題

平成17年度は、生活体験での関わりを大切にする意図から、スタッフと参加者が全日程自炊し、その中でのやりとりを重視することを試みた。また、プログラムは「選択制」とし、スタッフが提示した内容の中から、参加者が自ら考え選ぶかたちをとった。その結果、スタッフと参加者の間で、安定した関係を築くことができ、プログラムへ前向きに取り組む姿が見られた。

課題は、今までは参加者が1年ごとに変わるため、単年度での成果しか得られなかったが、今後は継続的な参加を認め、長期的な成果を検証していくことが重要と思われる。

### 5. 特徴

長期（9泊10日）と短期（3泊4日）のキャンプ期間中、スタッフと参加者が全ての生活体験をとにした。何気ない日常生活の中から自分を見つめ直し、他の人との関わり方を考える機会とした。

## 事業の特色

この事業は、参加者が自分自身を見つめ直したり、他の人との関わり方について考える機会を提供することに重点をおいている。挨拶をする、食事を作り食べる、お風呂に入るなどの何気ない毎日の生活を、スタッフと参加者が一緒に過ごしながらか信頼関係を築いた。この繰り返しの中で、参加者は少しずつ前向きに取り組むようになっていった。



<毎日の食事作りのための薪割り風景>

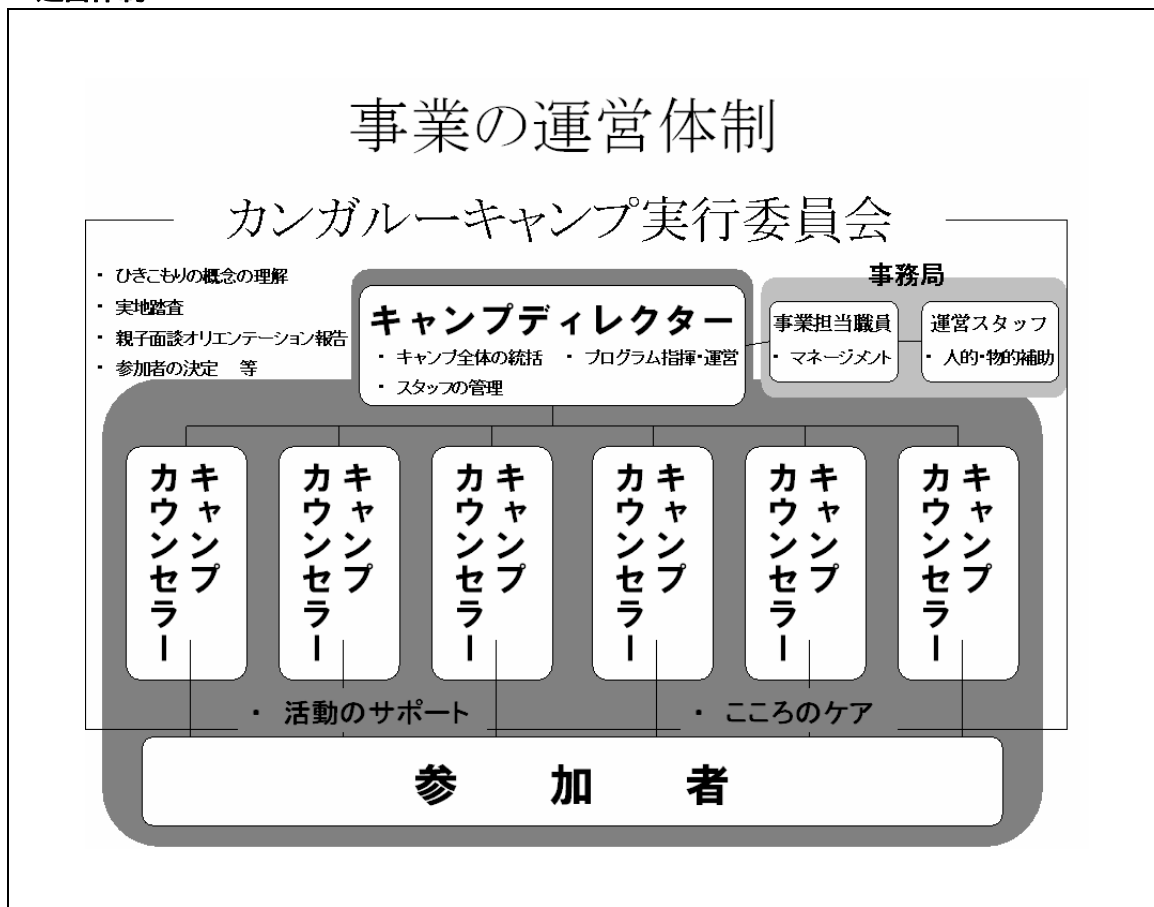
「ホッとキャンプ」では、まとめとして1泊2日のチャレンジプログラムを実施し、全員が同じ課題に挑戦した。

「フォローアップキャンプ」は、「ホッとキャンプ」やその後の生活を振り返る機会とした。夏のキャンプでできたことの再確認と、それを根付かせることを目的とした。



<チャレンジプログラムの様子>

## 運営体制



## 広報活動、普及活動の実施

月 日	内 容 (実施場所、参加者数、指導者数、資料等配布先 等)
11月 3日 ～ 11月 5日	「ユースフォーラム in 沖縄」にて紹介 (場所：沖縄青年の家、 参加者：186名、 指導者：1名)
11月 9日 ～ 11月10日	「岩手県内青少年集団宿泊教育施設合同研究会」にて紹介 (場所：岩手県立陸中海岸青少年の家、 参加者：50名、 指導者：1名)
3月 1日	「青少年の自立支援フォーラム」にて紹介 (場所：国立オリンピック記念青少年総合センター、 参加者：100名、 指導者：1名)
3月下旬	「ホームページ」への掲載 成果を報告書にまとめて、ホームページに掲載した。

## **アンケート結果や参加者の感想等**

参加者の心身の状況を考慮し、アンケート調査は実施していないが、下記のような感想が手紙で寄せられた。

「キャンプができて本当にうれしかった。また、みんなと一緒にキャンプがしたい。」

「キャンプに行ってから、なんか変わったような気がします。キャンプに行けて良かったと思います。」

以上のことから、キャンプに対する満足度は高いと思われる。

## **事業成果の普及・啓発**

参加者の募集の仕方や面談での注意点、「ひきこもり」の捉え方、対応の基本的な考え方など、これまでの試行や経験の蓄積をまとめ、自立支援フォーラムやホームページ上でその成果を発信した。特に「指導者に求められる資質とは」、「有効なプログラムは」、といった質問が寄せられ、こうした体験活動への関心の高さがうかがえた。今後、この活動が、「ひきこもり」についての理解につながるとともに、このような事業が全国的に普及することを期待したい。

## **団体のプロフィール(委託先)**

国立岩手山青年の家は、岩手山の麓に位置し、雄大な自然に囲まれている。

カンガルーキャンプは、平成17年度で5回目の実施となった。

## **担当者の感想、反省点等**

事業の実施に当たっては、具体的な計画を立て、ほぼその通りに実行できた。全ての時間及び生活体験をスタッフと参加者が共有することで、参加者に信頼関係が芽生え、前向きな気持ちを生み出せたと思う。前年度参加者が次年度のキャンプにも参加できるようになれば、さらに継続的な効果が得られるのではないかと考えている。

反省点としては、キャンプが長期間にわたるため、準備等も含めスタッフの負担がかなり大きい。少しでも、この負担を減らせる工夫が必要と思われる。また、プログラムにおいては選択制を取り入れているため、専門を要する活動の消耗品購入が計画的にできなかった。

青少年の自立支援を推進する

広報啓発、普及活動の全国展開

## 地域連携のためのコアリーダーの育成

特定非営利活動法人 自然体験活動推進協議会

### 1. 趣旨

青少年の不登校やニートの増加など、青少年を取り巻く問題は深刻化しており、主体性や人間関係、問題解決能力などを育む体験活動の機会を充実することが急務とされている。これまでも様々な体験活動が展開されているが、より効果的な青少年の自立支援のためには、異なる価値観、異なる観点を持つ人材の連携が必要であり、その連携をもとにした、適切なプログラムの企画・運営、及び、参加者を指導する人材が必須である。また、学校における長期の体験活動、教育施設等の民間委託が今後さらに推進されていくものと思われ、今後の人材不足が懸念される。このような状況に対応していくためには、以下の2つが必要だと思われる。

- ・ 地域内に潜在する人材を発掘・育成する、指導者を養成する人材を質、量ともに拡充する。
- ・ 地域レベルの取り組みを推進するために、地域内の組織や個人が各々の活動の特性や技能をもとに、地域内の連携と協働を促すことができる人材を養成する。

(以下、このような要件を満たす人材を「コアリーダー」と呼ぶ。)

本事業は、コアリーダーの育成方法の検討とトライアル事業を通して、今後の青少年の自立支援策に新たな視点を提供するものである。

### 2. 活動実施期間、活動場所、概要、参加者数

委員会：1/18、3/9(2回) / 国立オリンピック記念青少年総合センター(東京都) / 25名

部会：1/18、2/8、3/9(3回) / 国立オリンピック記念青少年総合センター(東京都) / 13名

有識者会議：1/20~21、1泊2日 / 国立オリンピック記念青少年総合センター(東京都) / 21名

トライアル事業：2/22~24、2泊3日 / 国立赤城青年の家(群馬県) / 48名

### 3. 試みと成果、課題

本事業を通して、地域連携のためのコアリーダー育成に必要な要件(対象者、目標とする人物像、趣旨・ねらい、育成手法)、具体的な事業内容、実施にあたっての基本要件、今後展開する際に必要な視点などについて実証することができた。

今後の課題としては、今回の成果を踏まえ、さらに継続的な事業を同地域および他地域において適用していくこと、及び、全国のコアリーダーが各地の仕組み・成功失敗事例などの情報をお互いに共有できる場や仕組みづくりが必要であることが挙げられる。

### 4. 特徴

地域レベルの取り組みを推進していくためには、地域内の多様な組織や個人が各々の活動の特性や技能をもとに連携と協働を進める必要がある。本事業では、民間団体だけではなく、地域行政や関係省庁(文部科学省、農林水産省、国土交通省、環境省など担当者)の担当者なども議論の場に参加した。

## 事業の特色、成果

「地域連携のためのコアリーダーを育成する」ための事業を今後展開していく上で課題となるポイントや基本要件について整理することができた。人材育成を進めていく際には、対象者、目標とする人物像、趣旨・ねらい、育成手法の4つの点を考慮する必要があり、今回の事業では以下を想定した上でトライアル事業を行い、それぞれの点について検証を行った。

### 対象者

- ・地域内での連携や協働に関心のある人、地域の活動を支援したい人(行政・企業・民間団体)、環境教育・自然体験活動・学校教育・青少年教育などの指導に携わっている人。
- ・幅広い分野から中心的に活動している人たちの参加を求め、ひとつの団体から多数の人に参加してもらうのではなく、各団体から1人もしくは2人に限定して参加してもらう。
- ・地域レベルの取組みを推進していくためには、関係省庁の本省や地域行政の担当者にも議論の場に参加してもらう。

### 目標とする人物像

- ・基本的には地域内の連携と協働を促すことができる、地域における指導者を育成できること等が挙げられるが、その詳細については各地域が抱える課題や状況によって異なってくる。

### 趣旨

- ・地域内で自然体験活動を中心に活動している人材を集結し、地域内連携と協働を促す。
- ・コアリーダーの重要性、役割、必要なスキル、地域内の各組織の連携のあり方を学ぶ。

### ねらい

- ・各セクター(省庁、地域行政、地域の民間団体)が互いをよく知り合い、自然体験活動を中心とした様々な活動が促進されること
- ・今後、全国各地で展開される養成事業の雛形をつくること。

### 育成手法

- ・本来は実際の現場を通じて必要なスキルやノウハウを習得することが望ましいが、現実的な方法として、現場を離れた場所で研修会を開催し、そこで習得したことを各自が持ち帰り、それぞれの現場で自分なりにアレンジしていけるようにする。
- ・今回の趣旨やねらいを網羅した内容をスクール形式のセミナーや既存の教材などを活用して習得することは難しいと思われるため、お互いを知るために、それぞれの取組み、成功・失敗事例、苦労話などに触れる機会を多くもち、それらを自分たちに当てはめていけるような場を用意する。

## 今後の課題

本事業は、各地域で、自然体験活動をテーマに連携し協働することによって、どのような持続可能な地域のあり方が描けるのか、そのために今の自分達にはどのような課題があるのか、課題克服のためにはどのようなことが必要か、何ができるのか、などの具体的で現実的なプランを描くことができ、そのことを共有できる場を提供することができた。また、日常分断しがちな行政と民間、行政同士、民間団体同士が、継続的に連携できることへのエンパワメントであることの意義も大きいと思われる。

そのためにも、養成会後のケアとマネジメントがさらに重要だと思われる。養成会は種まきと土壌づくりである。この養成会で作られたアクションプランを実際に取り組んだ後の発表会、あるいはステップアップのための養成会の実施をどのように実現できるか、連携と協働の受け皿がどう機能できるのか、この事業の成果はそこで問われると思われる。

今回の調査で得られた結果は他地域においても十分に活用することができ、広く全国に展開していくことが考えられる。今後、より多くの地域で今回の調査結果を活用してもらうために、今後は以下の点に留意して展開していくことが必要であると思われる。

- ・地域で独自に活動をしてきた人たちが連携することにより、自分たちの活動の広がりや深みをもたせることができることに気づき、さらに持続可能な地域社会づくりに主体的に参画し行動を起こすという意識をもつことができる場にすることが肝要である。
- ・前後の準備やケアなど大変に手間のかかる事業ではあるが、新たな地域活性化のための人材発掘や連携協働機能の発信の場づくりとして、趣旨のぶれない、地域ごとの事情にあわせた柔軟な手法で、最初の一步となる養成会を広めていくことが重要である。この成果を踏まえ、さらに継続的な事業を同地域および全国の他地域において適用していくことが必要である。
- ・コアリーダーを育成する場合には、各地域の取組み、ノウハウ、成功・失敗事例などをお互いに共有できることが望ましい。今後、全国のコアリーダー同志がこのような情報を広く共有できる場を設けることが必要だと思われる。全国のコアリーダーを一同に介したリアルな場である全国報告会等の開催、または、インターネット上で情報を開示・共有できるバーチャルなシステムを構築することが望まれる。こうした情報共有の場は既存のコアリーダーの育成だけでなく、新たなコアリーダー創出にも寄与できるものと思われる。

## 運営体制

検討委員会（委員長1名＋委員11名＋部員13名＋事務局3名＝28名）

	氏名	所属	役職
委員長	岡島 成行	大妻女子大学	教授
委員	佐藤 初雄	NPO 法人国際自然大学校	代表
委員	降旗 信一	社団法人日本ネイチャーゲーム協会	理事長
委員	川嶋 久義	社団法人農村環境整備センター	専務理事
委員	日野 昭男	財団法人都市農山漁村交流活性化機構	事務局長
委員	山本 雅史	財団法人河川環境管理財団	常務理事
委員	田邊 俊郎	財団法人港湾空間高度化環境研究センター	環境研究部長
委員	川嶋 直	財団法人キープ協会	常務理事
委員	広瀬 敏通	ホールアース自然学校	代表
委員	小林 孝之助	財団法人ボーイスカウト日本連盟	教育部門長
委員	柳瀬貴美子	社団法人ガールスカウト日本連盟	副会長

作業部会（部会長1名＋部員13名＋事務局3名＝17名）

部会長	佐藤 初雄	NPO 法人国際自然大学校	代表
部員	若林 千賀子	社団法人日本環境教育フォーラム	理事

部員	大浦 秀樹	財団法人ボーイスカウト日本連盟	
部員	海野 義明	オーシャンファミリー海洋自然体験センター	代表
部員	渡辺 峰生	社団法人ネイチャーゲーム協会	事務局長
部員	野口 透	NPO法人国際自然大学校 日野春校	校長
部員	森 雅浩	有限会社ビーネイチャー	代表
部員	穴戸 信一	財団法人都市農山漁村交流活性化機構	
部員	栗原 潔	有限会社ビーエス	
部員	加納 麻紀子	社団法人農村環境整備センター	研究員
部員	浮田 美彌子	社団法人ガールスカウト日本連盟	
部員	斉藤 隆	川に学ぶ体験活動協議会 (RAC)	事務局長
部員	鳥屋尾 健	財団法人キープ協会	
部員	新谷 雅徳	ホールアース自然学校	
部員	辻 英之	NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター	専務理事

#### 事務局

事務局	重 政子	NPO 法人自然体験活動推進協議会	事務局長
事務局	太田原 康志	NPO 法人自然体験活動推進協議会	事務局次長
事務局	沢目 教輔	NPO 法人自然体験活動推進協議会	

#### 委員会、部会、トライアル事業の実施日

開催日	委員会・部会	内 容
1月18日	第1回検討委員会	本事業の背景について説明。地域内での連携と協働を促す人材の必要性、役割、資質、また、養成会の目的、対象者、研修内容について検討した。
	第1回作業部会	第1回検討委員会の検討結果をもとに、養成会の目的、対象者、研修内容の素案を作成した。
2月8日	第2回作業部会	養成事業内容のとりまとめ、及び、養成会の諸準備を行った。
3月9日	第2回検討委員会	検討委員会での検討内容とトライアル事業を踏まえ、全体の取りまとめを行った。
	第3回作業部会	トライアル事業の実績、および、検討委員会の検討結果をもとに最終のとりまとめを行った。

実施時期	内 容
有識者会議 1月20日～21日 (1泊2日)	開催日程：平成18年1月20日～21日 1泊2日 開催場所：独立行政法人国立オリンピック記念青少年総合センター 参加者数：21名（作業部会委員、検討委員会委員、有識者、事務局） 内容：本事業にて検討する養成事業について、地域の現場ニーズに即した内容に仕上げるため、本養成事業の対象となる指導者およびコアリーダーの育成に関する有識者を集め、現場の状況やニーズについて意見交換を行った。
コアリーダー養成会 2月22日～24日 (2泊3日)	開催日程：平成18年2月22日～24日 2泊3日 開催場所：国立赤城青年の家（群馬県） 参加者数：48名（省庁関係者：5名、群馬県行政関係者：4名、群馬県内民間団体：20名、委員・部員・有識者：17名、事務局：2名） 養成事業：コアリーダー養成事業のトライアル事業を実施。